

教育大学・教育学部学生の教職への意識と意見

全国調査から

国立大学協会の教員養成制度特別委員会は、近年、児童生徒数の減少にともなう教員採用の急減傾向も一つの要因となつて、若者たちの教職離れが、加速度的に進行しているのではないかと、またその中で教職を選ぼうとする志をもつ学生の期待に大学の教育が十分に応えているかという問題に、現在、重大な関心を払っている。

このような問題を検討するために、(1) 制度的・構造的な側面の検討、(2) 会員大学における最近の教員就職状況の把握、(3) 会員大学における教員養成のための教育に関する状況の調査、(4) とくに教育大学・学部の学生に対する教職意識の調査、(5) 教育委員会に対する教員の需給の実態に関する調査を実施し、現在、それらを取りまとめながら、直面している問題状況にどのように対処すべきかを検討中である。

そのうち、教育大学・学部の学生を対象として行った教職意識調査は、平成5年1月下旬から2月中旬にかけて行ったものであるが、若者たちの教職への志向を端的に知る上で、重要な資料を提供しているのと、とり急ぎ集計結果の概要を中間報告することとした。

調査の概要 回答者数約5千人 教育大学・学部学生の約8%

本調査は、教育大学・学部の中から8教育大学と9教育学部に在籍する学生を対象とし、それぞれの大学・学部において各々約300名に対して実施した。

回答した学生は、4,903名(教育大学2,401名、教育学部2,502名)であり、教育大学・学部の全学生数の約8%に相当する人数である。

調査対象の学年と課程別の人数は、<表1>の通りである。1年から4年までの各学年の人数は、ほぼ同じであるが、5年生以上は、56名と少ない。学生の男女比は、性別の記入もれを除いて、男子1,814人(37.1%)、女子3,081人(62.9%)であった。なお、<表1>の中で、「障害児教育教員養成課程」と表記したものの中には養護学校教員養成課程及び盲学校、聾学校、言語障害児等の教員養成課程が含まれる。「その他の課程」とあるのは、いわゆる教員養成課程以外の「新課程」をさしている(註 それぞれの設問で、回答無記入の者は除外して集計したので、合計数は一致しない。<表1>の場合も、所属する課程または学年無記入の者は除外して集計した)。

また、本調査では、「教員養成大学・学部や教員という職

業について、あなたが今感じていることを自由に書いて下さい」として自由記述による意見を求めた。自由記述に回答した学生の割合は、男子68.3%、女子65.8%で非常に高い割合であった。これらの自由記述にも、教育大学・学部に在籍する学生が、いかに人生を悩み、教職について考え、今、大学で学んでいることについて時には興味を抱いたり、また思い悩んでいるか、したがってまた大学における教員養成にいかに関心を抱いているかが表れている。学生の自由記述の意見については、なお整理中であるが、本中間報告には、集計の結果と関連する学生の意見の一端を、関連箇所において紹介することとした。

<表1> 調査対象学生の所属課程と学年の人数

学年	1年	2年	3年	4年	5年以上	合計(%)
幼稚園教員養成課程	77	88	63	61	1	290(5.9)
小学校教員養成課程	594	786	657	530	22	2,589(52.9)
中学校教員養成課程	229	321	311	249	23	1,133(23.1)
特別教科教員養成課程	50	52	89	58	7	256(5.2)
障害児教育教員養成課程	76	91	89	50	0	306(6.2)
養護教諭養成課程	29	37	13	15	1	95(1.9)
その他の課程	50	59	79	39	2	229(4.7)
計 (%)	1,105 (22.5)	1,434 (29.3)	1,301 (26.6)	1,002 (20.5)	56 (1.1)	4,898 (100.0)

1. 国立教育大学・学部への志望と動機

アンケート調査では、最初に教育学部を受験しようとした時期、併願状況、志望の強さと動機などについて聞いた。

□志望決定の時期

学生の教育学部志望決定の時期は、高校入学後、とくに志望校決定を迫られた「受験直前」の段階であることが多い（<図1>）。

□国立教育学部併願は55.7%

学生の半数以上は、他の国立教育学部を併願しているが、私立大学を併願した学生は約40%弱であった。国立一般大学を併願している学生は、男子が約30%弱で、女子が20%弱である。半数強の学生は、国立の教育学部を併願しているが、国公立の一般大学・学部を併願している者も多い（<図2>）。

□教育学部志望の強さ

強い志望は40%未満

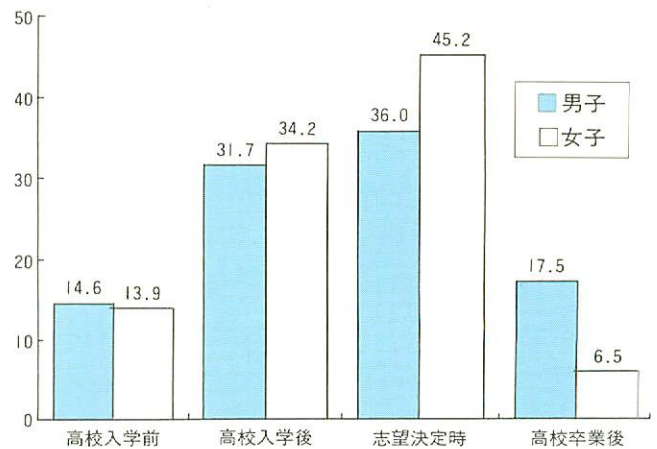
学部志望の強さは、強く志望していた者が男子40%、女子37%で決して多いとはいえない。しかし、多少その気がある志望した学生を含めると、全体で80%となり、予想より高い数値になる。あまり乗り気でない気持ちの学生と不本意で来ている学生の割合は、男子も女子も約20%である（<図3>）。

<表2> 進学決定の時期と志望の強さ（%）

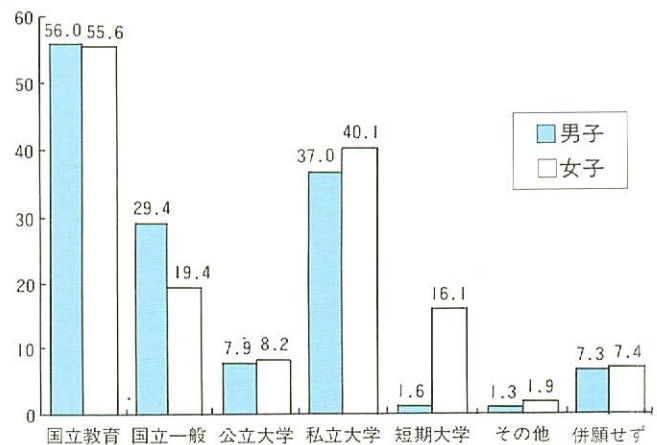
	強い志望	多少の気持ち	あまり乗り気でない	不本意
高校入学以前	87.3	11.8	0.9	0.0
高校入学後	53.3	41.6	4.6	0.5
志望校決定時	14.8	52.5	25.3	7.4
高校卒業後	19.8	39.1	24.1	16.9

<表2>は、教育学部を志望した時期と志望の強さとの関係を示している。この表からもわかるように早い時期に志望を決めた学生ほど強い動機をもって入学してきている。

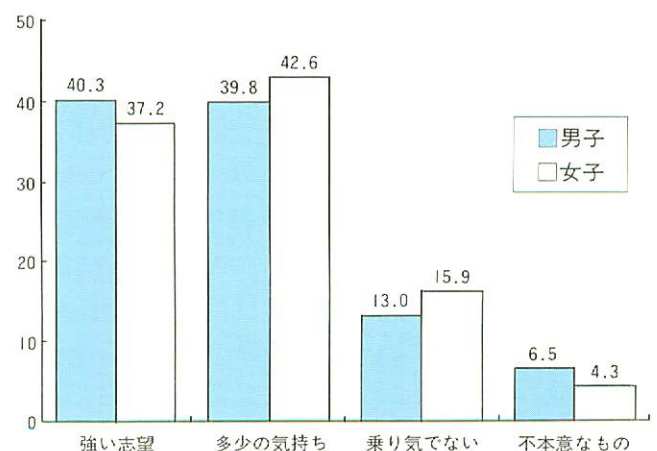
<図1> 教育学部を受験しようとした時期（%）



<図2> 学生の併願状況（%）



<図3> 教育学部を志望したときの気持ち（%）



（選択肢「強い希望だった」「多少の気持ちはあった」「あまり乗り気でなかった」「不本意なものだった」）

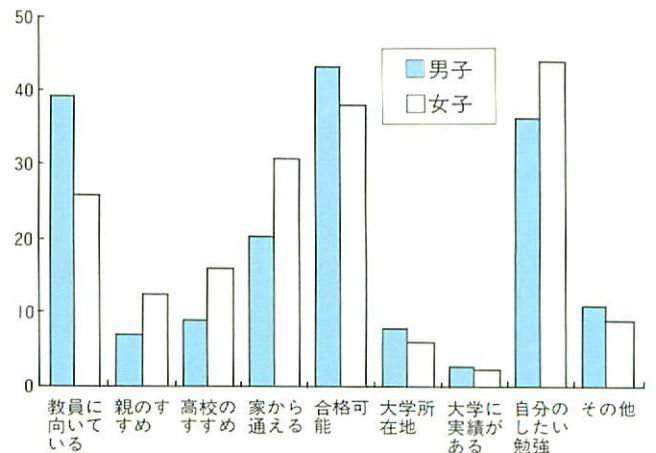
□教育学部志望の動機

〈図4〉は、志望動機を示しているが、男女によってかなり差異のあることが注目される。志望動機の多い順からみると、男子学生では、「合格可能である」―「教員に向いている」―「したい勉強ができる」―「地元だから」の順で、「合格可能である」からという動機が最も多い。女子学生では、「したい勉強ができる」―「合格可能である」―「地元だから」―「教員に向いている」となっており、「したい勉強ができる」というのが、最も多く、「教員に向いている」という動機は少ない。女子に「高校の指導」や「親のすすめ」がやや多いのは気になるところである。男女をあわせて、志望動機として多いのは、「したい勉強ができる」、「合格可能である」などである。「合格可能性」を動機として志望する学生が多いのは、偏差値による「輪切り」の影響をよく表している。「教員に向いている」という動機を選んだ者が、男子で40%、女子では30%に達していない点に、教育学部設置の理念・目的と、教育学部を選んだ学生の意識との間に、明確にずれがあるといえるだろう。

要するに、全体として、教職志望は多いとはいえ、高等学校の進学指導において、「本人の進学動機や目的」を自

覚させる方策や大学側の教育学部の意義のPRのあり方などが今後の重要な検討課題になると考えられる。

〈図4〉 学部志望の動機・理由（複数選択可）（%）



（選択肢「教員に向いていると考えたから」「親がすすめたから」「高校の先生がすすめたから」「地元の大学で家から通えるから」「合格が可能だったから」「その大学の所在地で生活してみたかったから」「研究や教育に実績があるから」「自分のしたい勉強が出来ると考えたから」「その他」）

2. 学生は大学に満足しているか

次に、教育学部に入学してから、自分の大学・学部にとどの程度満足しているか、満足や不満の対象は何かについて調査した。

□大学生生活に満足している程度

大学・学部の生活に「たいへん満足している」者は、男女あわせて13.7%できわめて少ない。「まあ満足している」者を加えると、満足している者は7割程度になるが、しかし、大学・学部の生活に不満に思っている学生が少なくとも男女とも約3割はいる（〈表3〉）。つまり、27%の学生が「やや不満」「たいへん不満」であるという事実は、教育大学・学部のあり方について、検討すべき課題があることを示している。

□教育大学・学部のあり方についての学生の意見

教育大学・学部のあり方に関する学生の自由記述意見を例示してみよう。

例1 「養成」という形でなく、その人がその大学に入って、教員をやりたいと思うような、そんな内容のある大学であってほしかった。このままでは確実に、単なる「卵をひなにかえす」大学でしかないと思う。教員

だけでなく、もっと他の研究がやれるような、そして教員として大切な人格形成のできる雰囲気のある大学であってほしい。

例2 教員養成の大学では学生も教官も、殆ど全員が、「この大学にいれば教員免許が自動的に取れる」という意識が異様に強い。そのことがよいと思える点も多いが、そのことが反面、教員になるということの熱意をさまたせているような気がする。

例3 教員養成大学だからといって教員養成だけに力を入れる必要はないと思う。もっと人間として成長できる教育、教員養成という枠に縛られない広い教育を期待したい。

〈表3〉 大学生生活の満足・不満の程度

	満足している	まあ満足している	やや不満	たいへん不満
男子学生数 (%)	287 (15.8)	1,023 (56.5)	391 (21.6)	111 (6.1)
女子学生数 (%)	384 (12.5)	1,860 (60.4)	741 (24.1)	95 (3.1)
男女計 (%)	671 (13.7)	2,883 (58.9)	1,132 (23.1)	206 (4.2)

例4 教員になりたいという気持ちもないのに、ここで学んでいるという人の数があまりにも多いのに驚いています。本当に望んでいる人が受験で失敗して涙をのんで、どうでもいいと考えている人が適当に入学しているのは矛盾しているような気がするし、もったいない気がします。

例5 今大学に入学してみて一番感じたのは、教員養成の大学であっても、実際に教員になりたいと考えている人が少ないし、教職に就く人も、もっと少ないということです。教員養成の大学なのに、教員になる気すらない人が、単に偏差値や無難で当たり障りのない大学と云うだけで入学して来るというのはとても残念なことだと思った。

□学年による 満足 の程度

学年別に見ると、どの学年でも満足 の程度はあまり変わらないが、1年生から、2年生にかけて、不満 の回答が増えており、3年生でも同程度 の不満がある（<図5>）。

しかし、4年生になると、「満足」「まあ満足」が増えて、「不満」が減っており、本報告に掲載したデータには示されていないが「満足」の内容として、「授業」や「教官」をあげる者が増える傾向にあることは、4年間の教育のあり方を考えていく上で、きわめて注目すべきことである。なお、5年以上の学生については、少数であるので、検討対象外とした。

□学部志望の強さと 満足 の程度 の関係

学部志望の強い者ほど、学部への満足 の程度は高く、不本意入学の者ほど、「たいへん不満」の者が多く、学部満足度は、学部志望の程度と相関的な関係にある（<表4>）。

<表4> 学部志望の強さと満足度（%）

	満足		まあ満足		やや不満		不満	
	男	女	男	女	男	女	男	女
強い志望	23.9	18.8	56.2	60.3	14.9	19.7	4.8	1.1
多少の気持	12.2	9.6	61.6	64.9	22.4	23.3	3.7	2.1
乗り気ない	6.8	7.2	51.5	54.0	37.9	34.2	3.8	4.7
不本意	5.9	5.3	36.4	39.4	23.7	32.6	33.9	22.7

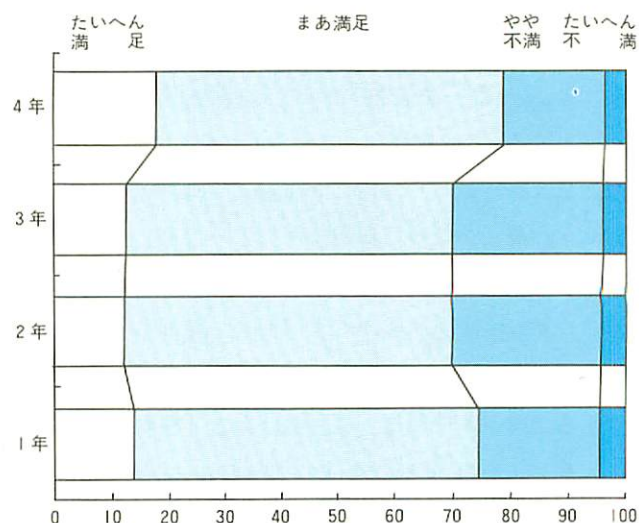
□「満足」や「不満」の対象

ところで、「満足」と「不満」の対象は、何に向けられているのだろうか。

それを示しているのが、<表5>及び<図6>であり、「たいへん満足」「まあ満足」の者は、友人関係などについて満

足している者の割合が多い。これに対して、「やや不満」「たいへん不満」の者の対象は、圧倒的に授業等に向けられていることが注目される。

<図5> 学年による 満足 の程度（%）



	たいへん満足	まあ満足	やや不満	たいへん不満
4年	17.7	60.8	17.3	3.8
3年	12.5	57.6	26.0	4.0
2年	12.1	57.7	25.8	4.2
1年	13.8	60.7	20.8	4.6

<表5> 満足・不満の対象（%）

<男子>	授業	施設	友人	教官	課外	他
満足	27.3	3.8	44.4	10.5	7.0	7.0
まあ満足	27.7	7.4	42.6	7.1	7.5	7.7
やや不満	64.7	21.0	1.8	3.3	1.3	7.9
不満	66.7	10.8	8.1	6.3	0.0	8.1

<女子>	授業	施設	友人	教官	課外	他
満足	40.9	3.9	39.3	6.5	5.2	4.2
まあ満足	33.7	7.8	43.7	4.1	4.4	6.4
やや不満	70.5	13.8	3.2	2.8	1.4	8.3
不満	53.8	11.8	6.5	5.4	4.3	18.3

<註記>この表は、学部の「満足、不満」と「満足、不満の対象」をクロスさせたものである。したがって、学部に対して、「満足」あるいは「不満」と答えた者が、何に対して、「満足」であり「不満」であるかの割合を示したものである。

（<表5>及び<図6>の選択肢、「講義、演習などの授業の内容」、「施設、設備など」、「友人関係」、「教官」、「課外活動」、「その他」）

不満の対象 不満は授業に集中！

ここには、友人関係には満足しているが、授業等には、大変不満が大きいという学生の意識の傾向が表れている。

□授業に対する学生の意見

学生の自由な意見の中にも、講義等への不満・批判は大変に多い。全体的に、講義の質の向上を求める意見もあるが、むしろ講義の内容が、教員養成にそぐわないこと、教育の現実に役立ちそうもないことへの不満、不安が大きい。逆に、教員養成向けであることからくる制限された講義内容についての不満も見られる。

(教員養成に役立つ授業を)

例 1 教員養成のための広い教養をもっと充実させてほしいと思う。現場に行って、役に立つような知識を広く取り入れ、教員の養成を行い、赴任してからすぐ活用できるように、他の大学との区別を明確に行ってほしいと思う。

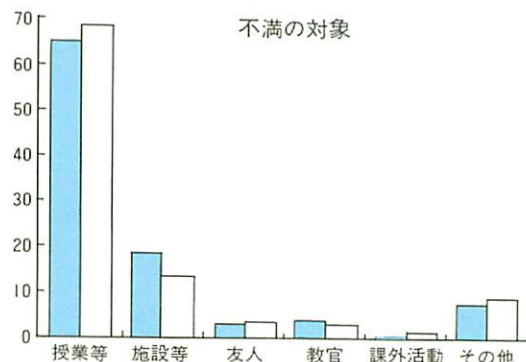
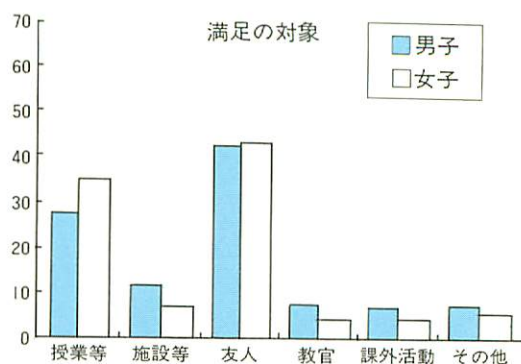
例 2 教員養成という名目ですが、入学してから、講義や教官などが、あまりにも現場から遠ざかっているような気がしました。これでは自分が卒業してから、どのようにやっていくか不安です。また学校に頼っているばかりでなく自分から学んでいく授業も必要だと強く感じています。

例 3 授業では、教員養成を目的としていることが明らかにわかる授業と専門授業でありながら一般教養のような曖昧なものがある。もう少し、小学校課程というものを意識した授業をしてほしいと思うことがある。先生によって授業の内容が違いすぎると思う。

例 4 小専〇〇とかいう講義なのに、先生の専門の話ばかりでこれが先生をしていく上で役に立つだろうかと思うものがある。教材研究の授業もそうで、小専と共にこれならば役に立つと思うものと、なぜこのような内容なのだろうかと思うものの差が激しい。講義名にあった内容にしてほしい。専門分野の内容はもっと詳しくしてほしい。

例 5 教員養成大学ならば、その名にふさわしい講義をしてほしい。「ほくは小学校のことは教えられないから、普通の専門の講義をします」ということは聞きたくない。教育学部なのに、自分の研究の為だけの講義をする教官がいる。教官の研究発表につきあう暇はない。小学生や中学生について全く無知な人から何が学べる

<図 6> 「満足」群と「不満」群の対象(%)



のだろうか。

(批判的能力や異なる考え方も)

例 6 教員養成大学では正しいこととして教えられることが多いように思う。もっと批判することや違った考え方ということを教えてほしい。

(教員養成も学問研究も中途半端)

例 7 教員養成大学に入って気が変わってしまった私も悪いが、一般教養や語学もそうだが、教職専門の講義の何と実践に役立たないことか、教員養成を本気でやる気がある学部なのかと思うことがままある。かといって、教科専門についてより深く専門的な知識が学べる機会があるわけでもない。何かすべて中途半端な気がする。教員を目指すにしても、専門を学ぶにしても、そのチャンスが得られないことが大学への不満だ。

例 8 教員養成大学は、実際に教師になる上での授業、カリキュラムにしても大学として学問をする場としても、どちらも中途半端で専門性や実践性に欠けるため考え直す必要があると思います。

例 9 大学の講義、とくに一般教養の授業に密度の薄いものが多すぎて嫌だ。専門の授業が多くなると楽しいし、感動することがたくさんある。無駄な四年間を過ごしたくないので、もう少し大学側の授業を考えてほしい。

3. 在学中の教職志望の変化

入学時にどのくらいの割合の学生が教職志望であったか、それが入学後、教職科目の履修や教育実習の経験などによって、学年が進むにつれて、どのように変化していくのかということは、教育大学・学部教育効果を考える上でも重要な問題である。

□教職志望の状況

大学や学部を志望する動機として、「教員に向いている」と考える者は30%程度で必ずしも多くないことは先に指摘したが、それに比べて入学時に教員になりたいと考えていた者は、68%（男子72.1%、女子65.7%）と比較的多い。当然のことながら、教育学部を強く志望していた者は、91.3%（男子93.8%、女子89.8%）までが入学時に教員になりたいと考えている。

また、あまり乗り気でなかった者や不本意であった者でも、ほぼ4分の1は教員になりたいと考えている。これは、教育学部に入学した結果として、教員になろうと考えた学生がかなりいることを推測させる。

これに対して、現在、教員になりたいと考えている者は、66.1%（男子69.7%、女子64.0%）で、入学時と比べてわずかに減少している。

しかし、入学時の教員志望と、現在の教員志望との関係を検討すると、この間にかかなりの数の学生に変動が見られ、それらが相殺しあって、両者の間に差がないという状況になっていることが明らかになる。

教職志望は在学中に変動する

すなわち、入学時に教員になりたいと考えていた者のうち、約17%は教員志望を捨てている。これとは逆に、入学時には、教職を志望していなかった者のうちで3分の1ほどの学生は、現在は、教員を志望している。

このように、入学時から現在までに、教職を志望するかどうかの考えを変更した者が、男子で、19.2%、女子で23.8%におよび、入学時に教職志望で、教職志望を捨てた者は11.6%、入学時に教職不志望で現在は教職を志望する者は10.5%に達する。

教育学部において、このように多数の学生が将来の進路について動揺を示しており、しかも大学生活を通して、僅かではあっても教職志望が減退するという傾向が見られる

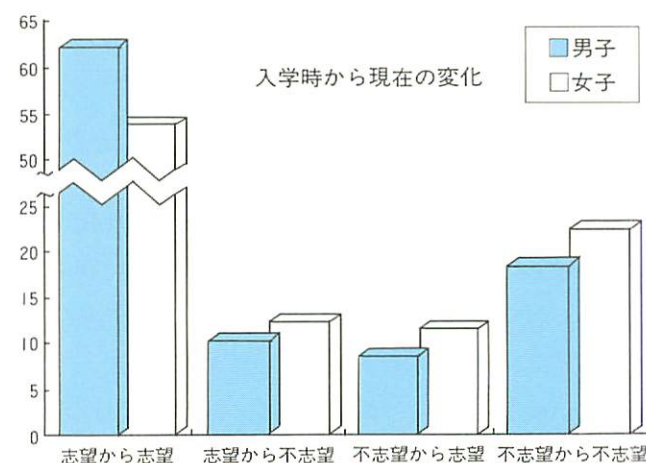
ことは一つの重要な問題である。

入学時から教職を志望していて、志望が続いている者と不志望に変化した者、不志望の者で、志望に変化した者と不志望のままの者の割合を一つのグラフに表すと、〈図7〉のようになる。

この図によれば、入学時から、教職志望で一貫している者の割合が多いが、入学時から終始教職不志望の者が20%以上いることがわかる。また志望していた者が不志望に変わったり、不志望の者が志望に変化した者の割合は、女子に多いことがわかる。つまり在学中に教職志望の有無はかなり変化するのである。

これを表に示すと、〈表6〉のようになり、入学時から現在も教職を志望している者は60%弱であり、不志望のままの者は約20%である。その他は、入学時から現在までに教職志望が変動した者であり、そのうち入学時に志望していた者が不志望に変わった者の方が不志望から志望に変わった者よりも僅かに多い。

〈図7〉 入学時教職志望と現在の教職志望の関係(%)



〈表6〉 入学時の教職志望と現在の教職志望の関係

教職志望の変化	男子人数(%)	女子人数(%)
入学時志望・現在も志望	1,108(62.3)	1,618(53.9)
入学時志望・現在不志望	186(10.5)	369(12.3)
入学時不志望・現在は志望	155(8.7)	346(11.5)
入学時不志望・現在も不志望	329(18.5)	669(22.3)

□学年による教職志望の変化

＜表7＞によれば、学年の進むにつれて、入学時より調査時点で、教職を志望する者の割合が少なくなっており、このことは男女いずれについても指摘できる。また、入学年度の新しくなるにつれて、入学時教職志望者の割合が、減少する傾向が顕著に表れている。

＜表7＞ 学年と教職志望（％）

学年	入学時教職志望者割合		調査時教職志望者割合	
	男子	女子	男子	女子
1年	66.0	62.3	68.4	66.6
2年	70.2	68.0	69.5	63.9
3年	74.4	66.7	70.7	64.4
4年	76.9	65.1	70.9	60.0
全体	72.1	65.7	69.7	64.0

□教育実習の影響

教育実習は教職意識に大きな影響 とくに女子学生への影響大

調査回答学生の内、教育実習を経験した者は45％（男子45.6％、女子45.4％）、まだ経験していない者は54％である。教育実習を経験した者は、教職についてどのような意識をもつようになったか、教育実習の影響はどうであったのかが、＜表8＞＜図8＞に示されている。

教育実習を経験することによって、教職に魅力を感じたり、自信を持つようになった者は、男子の約50％、女子の約40％であった。しかし、教育実習は、学生にとって、教職への魅力や自信を持たせると同時に、自分が教職に不向

＜表8＞ 教育実習を経験した学生の教職意識（％）

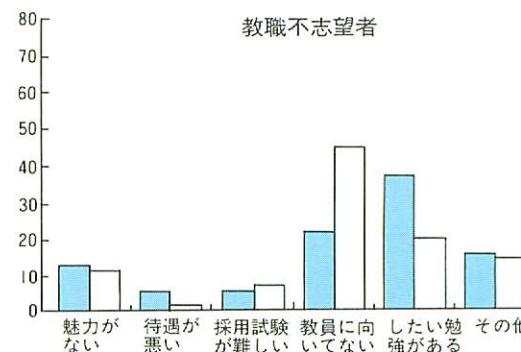
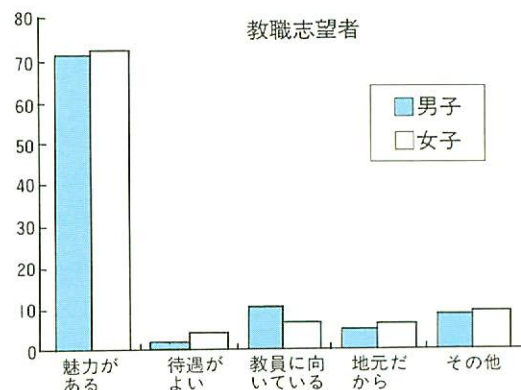
	魅力を感じた	自信をもった	困難だと感じた	駄目だと感じた	変化なし
男子	37.7	13.0	32.6	4.7	12.0
女子	30.9	9.8	40.8	8.5	10.1

（選択肢「ますます教職に魅力を感じるようになった」、「自分でもやれそうな自信がついた」、「やっていくのがむずかしいと思うようになった」、「とてもやっていけないと思うようになった」、「とくに変化はおきない」）

きだとか、教職は難しいという意識も強く抱かせることにもなっており、困難に思ったり、駄目だと感じた者が、男子で、37％、女子で49％もいる。女子学生の半数の者が、教育実習によってかえって教職に対する消極的方向への変化を受けており、ここにも一つの重要な検討課題がある。

＜図8＞は、教育実習を経験した後に、教職を志望する理由と、教職を志望しない理由をどのように選んでいるかを示したものである。教職を志望する者は、男女ともに、「教職の魅力」を選択した者が非常に多いことが注目される。これに対して、教職を選ばない者の理由として多くあげられているのは、自分は教員に向いていない、もっと勉強したいなどである。とくに女子の場合、自分が果たして教職に向いているのかやっつけられるのかと考えている者が多い。そこに、学生たちの迷いがあり、大学が、この問題にどのように応えていくかということは重要な問題である。

＜図8＞ 実習後教職を志望する理由・志望しない理由（％）



□教育実習の意義

このような教育実習のもつ影響力について、学生は、自由記述の中でも、その意義を次のように述べている。教育実習については、一般には実習体験への満足感が表明されており、批判や不満の意見表明は少ない。しかしまた、教育実習から受ける影響はきわめて大きく不安や動揺を招くことも多い。

(教育実習は貴重な体験)

- 例1 実習を経験する前、つまり自分自身が「生徒」という立場しか経験していなかったときまでは、教員という職業に向いている人は、「四角い箱の中にきっちりおさまる人」というイメージを持っていました。だから、自分には向いていない、と思いつつ入学したわけです。しかし実習ですばらしい先生に出会い（教科書の枠にとらわれず子どもたちの個性を引き出していた先生）、教職に対するイメージも変わり、とても魅力的な仕事だと思えるようになりました。また、子どもたちと一緒に成長できる仕事という点にも魅力を感じました。
- 例2 教育実習前まではただ単位をとるために勉強していましたが、教育実習を体験してみると、大学の先生方の話も意味がわかるようになり、興味が湧いてきた。アルバイト等を経験して、私には一般企業はあまり向いていないように思ったので、教員の方がよいかと思った。

(魅力はあっても不安)

- 例3 ますます教職に魅力を感じずるようになったと答えながら、それと同時にやっていくのが難しいと思うようになったのも事実である。教育実習以前から感じていたことがある。子どもは教師の一言で左右される場合が多い。とくに小学校では教師は絶対的存在である。このような教師のあり方に不安を感じる。

教職は魅力ある仕事 しかし 自分に向いているだろうか？

以上概観してきたように、在学中に教職志望の変動がかなり見られるのは、教職に関する情報の増大や、教員就職の難しさや教育実習の経験等によって、刺激されたり迷ったりするからである。事実、自由記述に見る教職観を見ると、教職の魅力を実感して強い志望をもつようになった者よりは、教職に魅力を感じているものの、果たして自分が教職に向いているのだろうか、やっていけるだろうかという迷いを表明する者の方が多い。さらに、教職についての批判的意見をもつようになる者も少なくない。

(教職のやりがい、すばらしさ)

- 例1 教師とは色々な面で非常に難しく、しかしそれだからこそ、魅力を感じる職である気がする。人相手の職

業で、毎日、何が起こるかわからない。ある意味での計画性のなさも魅力を感じる。だから大学生活において、教師にふさわしい人間になるための勉強をしっかりしなければならないと思う。

- 例2 教師は子どもを育てると同時に、自分自身も成長していかなければならないと思う。子どもと接触していく中で、ほんの少しでも感動を与えることができる教師でありたい。それができなくても、一緒に悩んだり苦しんだりする経験がもてるということが教師のすばらしさではなからうか。
- 例3 教師はとてもやりがいのある仕事だけでも、人間相手の職業なので、その分難しい仕事だと思う。人間性もみがかなければいけないと思うし、専門的知識も十分身につけておく必要があると思う。

(魅力はあるが自分に向いているか、やっていけるか迷う)

- 例4 大学を卒業したばかりのまだ何もわからない自分が、生徒の前に立って教えるということは、不安ばかりで恐怖を感じる。だが、大学の勉強を卒業後も活かしていきたいので、教師を目指すのが妥当であると感じている。大学は、非常に自由なところで、自分の好きなように生活ができる反面、何もせずに卒業を迎えてしまう人も多いのではないだろうか。自己管理ができる人だけが本当の意味で、大学で成功すると思う。教員はたしかにやりがいのある仕事であると思うが、実際にやっていけるかどうか、不安で一杯である。
- 例5 自分もこの春から、小学校で教員としてやっていくことになった。ひとまず、就職先が決まりほっと一安心だが、そう思って安心ばかりははしてられない。4月からは、子どもたちの前に立ち、先生として、教育者として振る舞わねばならないのだ。23歳で、人を教育する立場になるのだ。その責任は、非常に重い。現場に入れば、新米教師としてそれなりにやっていけるだろうとは思いますが、半分は信じられないような気がするもの、偽りのない気持ちである。初任者研修制度が導入されたが、それも話を聞いてみると十分でないような気がする。一度も学校という枠の中から出たことのない人間が、外の世界も知らずにまた学校の中に入るのかと思うと、何処まで真の教育者としてやっていけるかという問いに対して、疑問符をつけざるを得ない。これが現在の正直な気持ちです。

(やりがいはあるが不安で自信がない)

- 例6 人を教育すると言うことは本当に難しいと思うので、

入学前に比べるともっと教員になりたいという気持ちは薄れてきたように思います。自分に教員になる自信がないし人の人生を変えてしまうかもしれないという不安もあり、いまは教員になろうとは思っていません。

例7 とても魅力的な職業だと思うが、一つ間違えるととんでもない子どもを育ててしまいそうで怖い。子どもは教師の考え方に依存しているところが大きいと思う。だから教師になる人はあまり一つの考え方にとらわれずに広い心をもった人でないといけないと思う。私はその点において向いていないと思うので、教師にはならないつもりです。

例8 一生、自分の好きな分野の勉強などしながら、仕事ができる場所に魅力を感じていたが、教師というのはそれよりも生徒指導等の方が大切に見えてきて、自分には向いていないと思った。子どもへの強い愛情をもつ人でなければ教師になるべきではないと思う。

(教職への不満)

例9 教員が家庭の肩代わりをしすぎている。専門職としての地位が社会的に認められねばならない。

例10 テレビなどで、いじめの問題について、よく「気がつかなかった」という教師がいるが、それでいいのだろうかと思う。教師は子どもをどこまで理解すればよいのか、ただ勉強だけを教え、頭の良い子、人の言うことをよく聞く子を育てればよいのか、教師とは何なのかわからなくなった。

例11 子どもの生活環境が変化するにつれて、子どもの行動や思考・価値観なども変わってきているようなので、教員としてどう子どもに接していくのがよいのか難しいところだと思います。教育現場が、「熱意のある者が先ずダメになる」といった環境になりつつあるらしく、ひどいと思います。

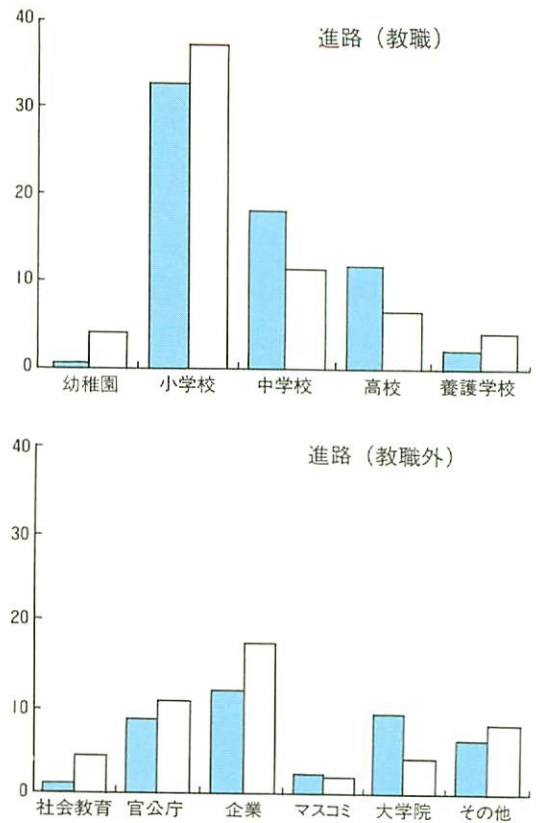
□卒業後の進路の希望

<図9>には、教育大学・学部で学んでいる学生が、調査時点では、かなりの高い割合で、教職以外の進路を模索している現実が表れている。

**今、教育大学・学部でも
教職離れが進んでいる**

「教職離れ」現象は、今日社会的に大きな問題を投げかけている。本調査においても、消極的志望をも加えると学

<図9> 卒業後の進路希望(男子■ 女子□ %)



<表9> 卒業後の進路に所属課程の校種の教員を希望する者の割合と教員希望者の割合 (%)

課程別	目的教員希望者割合	教員希望者割合
小学校教員養成課程	56.0	67.5
中学校教員養成課程	39.3	67.8
特別教科教員養成課程	34.8	66.8
障害児教育教員養成課程	45.4	78.8
幼稚園教員養成課程	34.8	61.8

生の7割弱(65.6%、男子67.4%、女子64.7%)が将来教職を志望している。しかし、他方で、教職志望と重複する者も含めて42%の学生(男子39.9%、女子42.7%)が教職以外の進路を考えている。

教員養成課程の所属課程の校種の教員を志している者の割合は、<表9>のそれぞれの課程が養成目的とする「目的教員希望者割合」が示す通りである。それ以外の者は、他の校種の教員あるいは、教員外就職を希望している者である。このように、所属する課程が養成目的とする教員を希望する者が、50%を越えている課程は、僅かに小学校教員養成課程のみであり、それ以外の養成課程でその校種の教員を希望する者の割合は低い。これはその地域の教員採用の枠や方法等とも深く関連しているが、校種別の教員養成

を目的とする課程が、実状に合わないものになってきている状況を示している。所属する課程の校種と関係なく、いずれにしても教職を志願している者の割合は、比較的高い

といえる。ただし、この場合、教員を志望しながらも教員外の他の進路をもあわせ考えている者が含まれていることに留意しなければならない。

4. 中間まとめ

学生たちのアンケートに対する回答の傾向は、現在彼らが置かれている状況を反映して、大変複雑なものとなっている。この中間まとめでは、北から南までの調査した教育大学・学部データを一括して取り扱い、地域による差異や個々の大学・学部による差異にはふれなかった。

□子どもの数の減少

全国的な人口動態は、子どもの数の長期にわたってのなだらかな減少傾向を示しているが、人口動態や、教員需給の関係も地域によって差異があり、教員採用状況も地域の条件によって著しく異なっている。そのことが学生の意識にも敏感に反映されている。とくに大都市圏や、周辺に大学が近接して立地されている地域ほど、問題は深刻である。

今、子どもの数が、確実に減少している。この事実は、既存のすべての教育機関に対して、予想を遙かに超える影響を与え、それぞれの教育機関が、新しい時代にどう対応するかについて、深刻な問いを提出している。

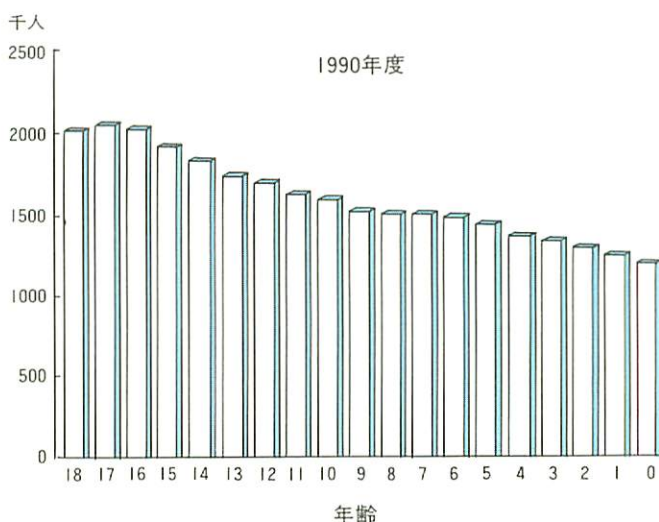
<図10>のグラフに見るように、1990年度における18歳以下の年齢別人口をみると、この年度において、すでに15歳人口（本年度18歳人口）は200万人を割り、その上、0歳児においては120万人に激減していることは、これからの学校教育に深刻な問題を投げかけている（総務庁統計局編『日本統計年鑑』1992年発行）。

子どもの出生率の低下が、長期的な日本社会の構造的な性格として定着し、児童生徒の数が減少していく状況は、もはや推計の問題ではなく、事実の問題である。そのことが、教員採用数を確実に減少させていく。これを多少なりと変化させていくものは、文教行政、教育政策における抜本的施策しか考えられない。このような、量的には、教員数の低減傾向を免れることができない現実の中で、教員となる機会の減少によって、若者の教職への意識と意欲の減退に拍車をかけているのが、教職離れである。教員養成に関わりをもつ者が、このような問題状況を強く意識し、このような時期にこそ、教育界に優秀な人材を確保するための一層の努力が必要であり、どうすれば学生が教職への魅力を見出し率先して教職を選びとり、教育界に定着し、未来を担う子どもたちを育てる仕事に安定的に従事できるかを検討しなければならない。

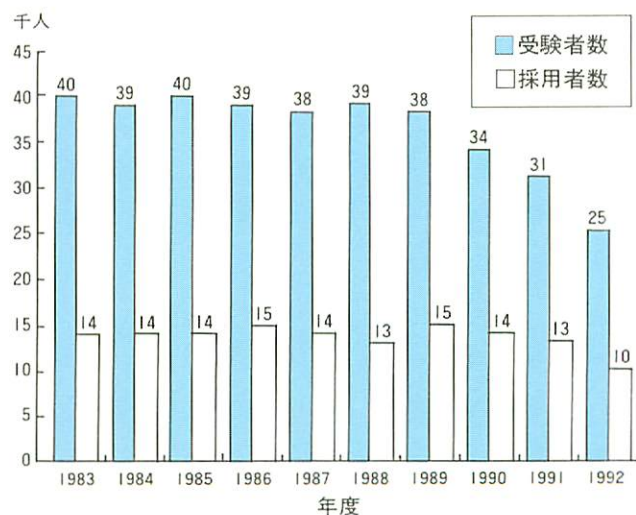
□教員志願者の減少

最近10年間における教員採用試験受験者数と教員採用者数の推移をみると、採用者数の減少以上に受験者数が、激減してきている状況を確認することができる（<図11>）。

<図10> 子どもの数の推移



<図11> 教員受験者数・採用者数の推移



このように、近年、教員採用数の減少傾向は、急速に進み、小学校教員の減少傾向を中等教育の教員需要が一時的にカバーしたものの、さらに採用者数の急減が始まり、それ以上に受験者数の激減傾向が表れてきている。

おそらく、子どもの数の減少の面から、学校教育が今後どのような役割を果たすべきか、教員供給はどのようなべきかが改めて問われるべきであり、教員志願者が激減

していることは、客観情勢もさることながら、教職が若者を誘引する力を衰えさせていることを示しており、教職への人材確保の点から抜本的に検討すべき問題があることを示している。これらの点からも今後の教員の養成と供給がいかにあるべきかが問われている。

□教員採用についての意見

教員の需給と採用状況についても、学生の自由記述意見には、次のように多くの意見が見られる。

とくに、教員採用数の減少については、学生の間でも、敏感にこれを受けとめている。

例1 教員になるために勉強してきたのに、定員が少ないために教員になれず、それ以外の職業に就かざるを得ないという状況である。

例2 子どもの数が減ってきて、このままでいくと先生が毎年1万人余ると聞くともものすごく不安を感じる。私は実際教師という立場で子どもに接したことはないが、先生が余るから1学級に2人先生をおくということについてもかえって不安を感じている。

例3 教員の採用人数が、これほどまでに少ないとは知りませんでした(とくに中学と高校)。こんなに少ないのなら、もう少し大学も教員養成課程の人数を減らした方がよいと思います。

例4 卒業後の採用が少ないにもかかわらず、教員養成大学の定員が多いのはどうかと思う。幼稚園などくに採用なしの年が続いているところが多いのに。

例5 教員養成という看板を持ちながら、大半の者がその道へ進むことが困難であるという状況には、問題があるように思われる。

これらの意見は、教育大学・学部の今後のあり方に関わる重要な問題を、投げかけており、本委員会としても、具体的な改善方策を検討しなければならないと考えている。

□現状認識と今後の検討課題

教員の需給関係や教職への志向の問題状況は、地域による差異や大学・学部による差異も考慮しつつ、今後、一層根本的な分析検討がなされ、文教政策及び行政の対応も含めて将来計画が策定されなければならないことを提示している。この調査と並行して行った、大学・学部や教育委員会に対する調査からも、多くの問題が投げかけられている。今、大学は、大学設置基準の大綱化とそれに基づく教育改革、自己点検評価の実践で大揺れに揺れている。その中で、新免許制度下の今後の教員養成教育をどのように位置づけ

ていくのか、また教育委員会が、教員の資質向上に関して、初任者研修や新免許制度をどのように運用していこうとしているのか、そしてそれらのすべての動向と関わりながら、教育大学・学部が、今後どのように高等教育における位置と役割を見いだしていくのかについて多くの問題が山積している。

このような状況の中で、上述の学生アンケートの検討から、投げかけられている問題にどのように応え、百年の大計といわれる教育の鍵となる、優れた教員の養成確保をどのように進めなければならないかについて、引き続いて検討を進めていきたい。

(1) 本調査によると、かつての教育学部進学者に比べて、教員志望は低下している。進学の理由も、教員になりたいという動機が第1位ではない。合格ができるからとか、したい勉強ができるからという理由で、教育学部を選んでくる者が多い。したがって、是非教員になりたいと考えている者は、さほど高い割合であるとはいえない。教育学部の学生についても、教職離れは確実に進んでいるということが出来る。

(2) このような状況は、受験体制の影響もあるが、次のようないくつかの原因が重なり合ってもたらされている。まず、教職の採用者数の減少傾向が教員になりにくい状況をもたらしており、教職それ自体は重要な職業であると認識していても、果たして教員になれるかどうか、自分にとって最も適する職業であるかどうかの迷いをもたらしている。あるいは、教員採用の決定時期が遅いという問題等も、彼らを躊躇させている。さらには、近年の教職批判や、教員の職場に種々の問題があることの指摘、そして教員待遇の相対的低下等による教職の社会的地位の低下、その結果としての教職の魅力の喪失なども若者を教職から遠ざける原因になっている。いずれにしても、若い人たちの教職離れは、確実に進行しているといえる。

(3) また、教職に強い志望をもっている者にも、逆に教職から心の離れかけている者にも、どちらにとっても、教育大学・学部のカリキュラムや教育のあり方は、不満となっている場合がある。その結果、「まあ満足している」という者を含めれば、比較的高い満足度を示すが、「まあ満足している」という者にも、実は大学に対する様々な要求がある。

教職に強い志望をもっている者から見ると、大学で

提供されている知識や学習内容が、果たして教育の実際に役立つだろうかという疑問につながっている。逆に教職離れの学生から見ると、教育学部だからといって何も教員になるわけでもなく、またなろうとしてもなれない状況の下で、教職を強く意識しすぎた授業が多くて不満だという状況がある。

- (4) 以上により、この中間報告から次の三つの点で、抜本的方策が求められていることを確認し、引き続きその方策について検討を進め、これに対する具体的な対応策を講ずる必要がある。

第一に、教職の魅力を回復させるための、抜本的施策を講じなければならない。子どもの数の減少の中で、教育界に安定的に優良な教員を供給し得る中長期的な採用政策、教員配置政策を実現し、教員の採用にあたっては採用内定の時期を早めること、教員待遇の大幅な改善を図ること、教育の職場を教員の自主性や創意が活かされるような活動の場とし、勉強を続けられる場とすることなどである。

第二に、大学教育の改善充実である。カリキュラムを改善し、教育学部においても、人間形成に関する研

究教育を基盤にしながらも、多様な進路の選択が可能となるような履修方法を追求したい。そして、教員を志している者に学びがいのあるように、教育実習と関連づけて教職に関する科目の充実を図ることが必要である。また、教員を志す者にもそうでない者にも、自由な選択科目の履修の幅を大きくして、個性と創造性を伸張させる専門教育の方向を重視する必要がある。

新しい真の意味の学力を培い、適切な進路選択の指導を行うためには、教師自身が、心豊かな人格とそれぞれの専門分野における個性的創造的な能力を培っておかなければならない。

第三に、教育大学・学部のあり方である。教育大学・学部における専門的な研究と教育の特色の創出、現職教育における役割の充実等を含めて、優れた研究者が、良い教育者であるような、人材の社会的需給関係に左右されないような大学・学部のあり方を抜本的に構想する必要がある。

以上のような観点から、今後引き続いて本委員会の分析検討を進める予定であるが、とくにお気づきの点があれば、委員会宛ご意見をお寄せいただきたい。

■ 本調査結果についてのご意見をお寄せください。宛先は下記の通りです。

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

国立大学協会事務局 内

教員養成制度特別委員会

■ 国立大学協会教員養成制度特別委員会は下記の委員で構成されています。

蓮見 音彦 (委員長・東京学芸大学長)、谷本 一之 (北海道教育大学長)、横須賀 薫 (宮城教育大学教授)

星埜 惇 (福島大学長)、堀川 清司 (埼玉大学長)、椎名 萬吉 (千葉大学教授)、将積 茂 (愛知教育大学長)

篠田 弘 (名古屋大学教授)、武村 泰男 (三重大学長)、尾上 久雄 (滋賀大学長)、加茂 直樹 (京都教育大学長)

山田 昇 (奈良女子大学教授)、山田 深雪 (島根大学長)、野地 潤家 (鳴門教育大学長)

金谷 茂 (愛媛大学教授)、田代 高英 (福岡教育大学長)、光永 公一 (大分大学長)

岡本 洋三 (鹿児島大学教授)、関口 茂久 (滋賀大学教授)